

大会 第1日

10月1日(土)

研 究 発 表

10月1日(土) 研究発表

第1分科会 会場：7号館1階 104教室

司会： 大間 敏行（近畿大学九州短期大学） 米田 俊彦（お茶の水女子大学）

- [1] 9:00 教育令期の法令解釈とその運用
湯川 文彦（東京大学・院）
- [2] 9:30 文部省と内務省間人事の再検討
—文官高等試験以後の文部省幹部—
松谷 昇蔵（早稲田大学・院）
- [3] 10:00 1900(明治33)年の小学校令施行規則における棒引き仮名遣いの採用
ARIPOVA KAMOLA（京都大学・研）
- [4] 10:30 小学校の兵式体操指導教員
佐喜本 愛（九州産業大学）
- [5] 11:00 学校と家庭をつなぐメディア
—東京府青山師範学校附属小学校「学校家庭通信」にみる学校と家庭の連絡—
山梨 あや（慶應義塾大学）
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

第2分科会 会場：7号館1階 103教室

司会： 上田 誠二（横浜国立大学・非） 菅 道子（和歌山大学）

- [6] 9:00 明治期における学校教育現場への音楽教育導入の背景
須田 珠生（京都大学・院）
- [7] 9:30 奈良女子高等師範学校と附属学校における学校園
田中 千賀子（武蔵野美術大学・非）
- [8] 10:00 大正期の「野外における教育」と教育環境の拡充
—東京市の公私立小学校による「林間学校」を中心に—
野口 穂高（早稲田大学）
- [9] 10:30 昭和戦前期のディベート実践
熊谷 芳郎（聖学院大学）
- [10] 11:00 岐阜県多治見市立養正小学校における器楽教育実践
—戦後教育改革期の公立小学校における音楽教育の一断面—
檜下 達也（神戸大学・院）
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

—第1日 午前—

第3分科会 会場：7号館1階 101教室

司会： 川村 肇（獨協大学） 小野 雅章（日本大学）

- [11] 9:00 教学刷新体制下の国体論と神道・国学
藤田 大誠（國學院大學）
- [12] 9:30 第4・5期国定教科書使用時期の国語教育論にみる
自然愛の語りとその歴史的特徴 —日本精神と自然愛—
林 潤平（京都大学・院）
- [13] 10:00 昭和戦前期における芸能科「習字」成立の背景
—石橋啓十郎の教育書道論を中心として—
鈴木 貴史（帝京科学大学）
- [14] 10:30 石森延男編纂の国語教科書に関する研究
—『満洲補充読本』にみる言語活動に着目して—
宇賀神 一（神戸大学・院）
- [15] 11:00 1930年代から1940年代前半に於ける
福岡県教育会『福岡県教育』に掲載された行事教育の検討
余公 裕次（福岡県春日市立春日原小学校）
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

第4分科会 会場：7号館2階 201教室

司会： 木村 元（一橋大学） 高橋 陽一（武蔵野美術大学）

- [16] 9:00 S. スマイルズら英国人が中村正直訳書を通して五日市憲法草案関係者に
与えた影響 —千葉卓三郎(1852-83)の教育論を中心とした考察—
岡本 洋之（兵庫大学）
- [17] 9:30 私立尋常中学橘蔭学館における藤村作の学校革命／学校騒動
岩木 勇作（創価大学・院）
- [18] 10:00 明治30年代半ばにおける教師の教育研究の位置づけ
—大瀬甚太郎の「科学としての教育学」論と教育学術研究会の活動に注目して—
白石 崇人（広島文教女子大学）
- [19] 10:30 「人間の誕生に関する質問」への教育研究の登場
—児童研究から性欲教育へ—
小泉 友則（総合研究大学院大学・院）
- [20] 11:00 1930年代初頭成城小学校におけるカリキュラム研究の展開と限界
—小林茂の郷土地理教育論を中心に—
足立 淳（新潟医療福祉大学）
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

第5分科会 会場：7号館2階 202教室

司会： 桑原 清（北海道教育大学） 宮本 健市郎（関西学院大学）

- [21] 9:00 19世紀後半ロシアにおける中等学校生徒の入退学・進学動向
—1870～1880年代の実科学校を中心に—
宮本 竜彦（岡山大学・院）
- [22] 9:30 クルプスカヤの活動と教育言説の「古典」性について
所 伸一（北海道大学・名）
- [23] 10:00 デューイ・ソヴィエト教育視察団とそのメンバーたち
—戦間期アメリカ・リベラリズムの一断面—
森田 尚人
- [24] 10:30 ウィネトカ・プラン成立期における活動領域の位置づけ
宮野 尚（東京学芸大学・院）
- [25] 11:00 1920・30年代のアメリカ女性大学人協会(AAUW)によるフェローシップ制度改革
坂本 辰朗（創価大学）
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

大会 第1日

10月1日(土)

シンポジウム

10月1日（土） シンポジウム

会場：教育文化ホール1階 大集会室 14:10～17:40

《テーマ》 教育史研究の新たな船出 —教育史研究はどこに向かうべきか—

- 〔提 案 者〕 Richard RUBINGER (インディアナ大学教授)
韓 龍震 (高麗大学校教授)
辻本 雅史 (国立台湾大学教授)
- 〔指定討論者〕 越水 雄二 (同志社大学准教授)
Niels VAN STEENPAAL (京都大学准教授)
- 〔司 会 者〕 一見 真理子 (国立教育政策研究所)
大戸 安弘 (横浜国立大学)

《テーマ設定の趣旨》

国際シンポジウムも3回目となる。これまでの教育史研究の歩みを振り返りつつ、流動性が進む行く21世紀前期社会の現実を視野に入れ、今後の教育史研究の新たな可能性について、その道筋を確認することとしたい。

この国で教育史学は19世紀後期に教職のための学問領域として出発したが、その後はそれぞれの時代状況に直面しながら近代的ディシプリンとしてのたしかな位置を求めての歩みが続いた。1930年代にはそれまでの個別の大学を単位とする閉鎖性を越えた組織的な活動の場として日本教育史懇談会が発足し、40年代に教育学関連では初の学会となる日本教育史学会へと転じた。さらに東洋教育史学会、西洋教育史研究会も続いた。やがてこれら三つの組織は個々の活動を継続しつつも、相互交流の組織として一体化し、1956年に教育史学会が創設されるに至ったのであるが、その意図は、日本・東洋・西洋といった境界を横断した視野の広がりを持った新たな教育史像の構築といった点にあった。しかし、こうした学会創設の原点への意識は、創設から20年ほど経過した70年代には薄れつつあったようだ。会員数の増加に伴う蓄積もあって研究の専門分化が進行したからである。このことは現在に至るまで克服すべき問題としてしばしば指摘されている。

学会としてのあり方が曲がり角を迎えていたこの時期に、『20周年記念誌』（1977年）が刊行されているのだが、同誌で「教育史研究の動向」を執筆した入江宏は、その冒頭で教育史学の草創期を切開いてきた先駆者としての石川謙(1891-1969)について述べている。石川は、『石門心学史の研究』（1939年）で戦前に、『古往来についての研究』（1950年）により戦後にと二度学士院賞を受賞しているが、こうした一連の業績によって教育史研究は日本アカデミズムにおける市民権を獲得し得たとしている。

こうした石川の生涯や研究歴を多少なりとも紐解いてみると、そのユニークネスに引きつけられ

る。膨大な古典籍や史料に取り組み、中世・近世教育史に関する圧倒的成果を残した碩学というイメージとは異なる相貌が浮かび上がってくる。意外なことに、戦前・戦後の同時代の教育史研究の本流から距離を置いたところで独自性を追究していたという側面が強い。それ故に、戦中・戦後を通して時代状況に迎合することの無い学問的立場を一貫し得たともいえる。

さらに、石川は海外の研究者との学問的交流にも積極的であった。たとえば、『江戸時代の教育』（原題：Education in Tokugawa Japan, 1970）で知られる R.P. ドーアや『日本近代化と教育』（原題：Society and Education in Japan, 1969）で知られる H. パッシンは、石川の後押しを受けてそれぞれの研究の基盤を固め、そこにイギリス人やアメリカ人ならではの独自性を盛り込んだ。とりわけ近世社会における日本人の識字率の高さを、そしてそれを支えた教育的達成の高さが後の近代化の成功を導く要因となったと強調した。こうした主張は批判も受けたが、歴史学、民族学、社会学などの諸分野に根強く浸透し、教育史とりわけ日本教育史研究の世界にも強いインパクトを与えたといえる。「近代化と教育」は80年代に至るまで、主要なテーマとして扱われることが多く、その後も「近世と近代との連続・非連続」が問題とされる傾向も強い。

こうしたなかで教育史領域でいち早くドーアやパッシンに触発されたのが石川であった。会津藩の事例に注目して『近世教育における近代化的傾向』（1966年）を発表し、彼らの主張に呼応しているが、同時に事実から分析しようとし、理念からアプローチするドーアやパッシンとの違いを際立たせようとしている。かつて、教育史学会創設時の理念を意識し、海外の研究者との間に単なる伝達とか受容というレベルを越えた交流が成立していたことを、あらためて想起するべきであろう。ここでは、イギリス人・アメリカ人・日本人としての個々の独自性を保ちつつ、日本近世の教育について異なる角度からアプローチし、相互にインスパイアする関係が生じていたといえる。

今回のシンポジウムは教育史研究の深化と学際化・複合化との並立を求めようとする教育史学会創設時の理念を意識しつつ、新たな知の遍歴のための船出に必要な試みは何かという問いから発している。20世紀末からグローバル化への波が一举に押し寄せてきたが、日常の生活レベルでも世界との距離が急速に縮まりつつある現実を意識せざるを得ないし、またそれ故の困難さも実感する現代社会である。このような背景には、国家間の関係性も大きく変わりつつあり、主権国家の存立基盤に疑いさえも生じている状況がある。大きな変動期が迫りくる可能性が高い現代、固定化されたかのように見える枠組みを乗り越えて、新たな新天地への船出を意識した教育史研究のあり方について議論し、新たな教育史像を具現化するための道筋を求めたい。教育史学会においては「永遠の課題」と目されることもあるが、そのとば口において、日本の教育史学を切開き、教育史学会草創期にこの課題について研究者としてのあり方を示した石川謙の足跡を振り返ることから始めることにしたい。

〈提案者プロフィール〉

Richard RUBINGER (リチャード・ルビンジャー)

インディアナ大学教授。Ph.D. 研究領域は日本教育史・文化史。

主な著書に、Private Academies of Tokugawa Japan, : Princeton University Press, 1982 (『私塾：近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』石附実、海原徹訳：サイマル出版会、1982として邦訳)、Education in Japan : a source book (Edward R. BEAUCHAMP, Richard RUBINGER : Garland, 1989)、Popular Literacy in Early Modern Japan, :University of Hawaii Press, 2007 (『日本人のリテラシー 1600-1900年』川村肇訳：柏書房、2008として邦訳)、訳書に、Siebold's Daughter, :MerwinAsia, 2016 (原著、吉村昭『ふおん・しいほるとの娘』毎日新聞社、1978、新潮文庫、1993) などがある。

韓 龍震 (ハン・ヨンジン)

高麗大学校教授。教育学博士。前韓国教育史学会会長。韓国日本教育学会会長。研究領域は教育概念史・比較教育史。

主な著書に、『近代韓国高等教育研究』(2012、ハングル本)、『近代以後日本の教育』(2010、ハングル本)、『ジャパンレビュー2012 : 3.11東日本大地震と日本』(共著 : 2012、ハングル本)、『東日本大震災と日本—韓国からみた3.11』(関西学院大学災害復興制度研究所編集、2013)、『歴史の中の教育空間、その哲学的眺望』(共著 : 2011、ハングル本)、『教育思想史』(共著 : 2009、ハングル本)、『韓国近代大学の成立と展開』(馬越徹原著、韓龍震ハングル訳 : 2001) などがある。

辻本 雅史 (つじもと・まさし)

国立台湾大学教授。京都大学名誉教授。文学博士。研究領域は教育史・日本(近世)思想史。

主な著書に、『近世教育思想史の研究-日本における「公教育」思想の源流』(思文閣出版、1990)、『「学び」の復権—模倣と習熟』(角川書店、1999、岩波現代文庫、2012)、『教育を「江戸」から考える-学び・身体・メディア』(日本放送出版協会、2009)、『思想と教育のメディア史-近世日本の知の伝達』(ぺりかん社、2011) などがある。

〈指定討論者プロフィール〉

越水 雄二 (こしみず・ゆうじ)

同志社大学准教授。教育学修士。研究領域はフランス教育史。

主要論文に、「プロワイヤールの『公教育論』-フランス近代公教育の形成過程を解明するために-」(『京都大学教育学部紀要』42、1996)「コンドルセの公教育構想が目指したもの-生涯学習による公教育の止揚-」(『教育文化』21、同志社大学社会学部教育文化学研究室、2012) などがある。

Niels VAN STEENPAAL (ニールス・ファンステーンパール)

京都大学准教授。博士(教育学)。研究領域は日本近世思想・文化史。

主要論文に、「Taming the Fire Horse: The Free Distribution of Anti-Superstition Pamphlets in Early Modern Japan」(『East Asian Publishing and Society』5 : 2号、2015)、「近世中期在村における「孝子顕彰」の社会的基盤—「由緒」としての「孝子」」(『日本教育史研究』31号、2012) などがある。